

徒然草の略で、吉田兼好の隨筆書である。そのいふ所老莊孔孟の教を交へ、殊に佛説を主とし、社會萬般の愚付の儘を書きたるものである。

*つれづれ 何人なればこの様に懇にして下さると、顔をつれづれながむれば、梅川いとど胸づばらしく(冥途飛脚)

*つらつら 黝。つくづく。

*つるしめ 堆朱の香箱御前に差出せば(孕常盤)

*つみな 御大將義教公・赤沼が館に入御あつて追儼の御祝儀行はる(聖女)

*つね 昔官中で毎年十二月晦日に疫鬼を拂ふ爲に行はれた儀式であつて、鬼やらひともしふ。民間でもそれに倣うて、節分に豆を打ち鬼を追拂ふ式をなす。これを鬼やらひともしふ。序に云、朝廷で追儼の式が行はれたのは慶應三年十二月に行はれたのが最初である。

*つねはう 科は何ぢや知れぬが、勝次郎は追放で八幡は煮える(淀離)

*つねはう 追放(徳川時代に行はれた刑法で、役人数多附送つて勝手に割竹を持ち、罪人の國籍を削り財産を没収して領地境まで連出し、それより国外に追拂うためである)。

*つねぶく 武門の御身に御信心御孝行の御追福感し入り候(心中萬年草)

*つを引く 「つ」を見よ。

*つんざく 御迎にと存じ候處につんざいての御入り、外開忝く

侯(西王母) 突開で、即ち突然進んで来る意であらう。

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

*つんばい 五したに打きり、つんばいれあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大羅冠)

越の様に「畫にて候へば手過にてはよも候はじ、いかにさまも敵の寄せて火をかけたると見え候。

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛の(兼好)

宋文天祥の正氣歌に「鼎甘如飴。ていこ 丁固が夢の常盤木は貌姑射の山に枝を鳴さず(文武五人男) 莊周が蝴蝶・丁固が松、きのふは今日の夢ぞかし(翁教經)

丁固支那三國時代の人で、呉に仕へて司徒となつた、初め丁固が腹上に松の生じたことを夢み、人の語つて言ふに、松の字を分解すれば十八公となる。後十八年で公の位に昇るであらうと、遂にその通りになつた。異録に、丁固夢松樹生其腹上、人謂曰、松字十八公也、後十八年其爲公乎、遂如夢也。

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛙合戦)

「皇」にへればの約。古事記。和銅五年安
 萬臣朝臣の序に「撰録辨田阿闍所誦之見
 舊辭(以上)者、隨隨認言(子細探せ)と
 見、東鑑などにも「者」の字を「て」はと訓
 んである。饅頭屋本節用集に、「者」の
 字を「て」はと訓、支那の書に天子の詔勅臣下の奏
 書を多く、支那の字を用ひるに據つた下の奏
 書に、多く「者」の字を用ひるに據つた下の奏
 *てう 心底が語りたさ(傍へ)寄れば、
 びかしかつ(か)と物言のあるてう、安
 堂寺町とは何事ぢや(今官) 何處そ
 に(暇)が結んであると、辛氣のある
 てう、御心がもたつきそめ(千正)
 「俗」限り。(全際本には「有じや」とな
 つてある。)(なんで)その條を見(ら)の
 ぶとは別。

てうかう (孕婦態)(大縮冠)
 「趙高(秦始皇帝の臣である。嘗て諸臣の心を
 試さうとして、二世皇帝に鹿を獻じて馬だと
 言つた。二世皇帝笑つて之を御の臣に問う
 た。趙高その鹿だと言ふ者を法に處した。是
 より群臣皆畏れて敢て言ふ者がない。趙高の
 專横極りなく、遂に帝を弑した。聖位に即く
 に及んで趙高を族誅した。妻しくは史記秦
 本紀などに就いて見よ。

てうすが 異國の王義之、趙子昂
 が石に入り木に入るも、和畫に於
 て例なし(反魂香)
 「趙子昂趙孟頫は號を子昂と云ひ、宋の人で
 ある。畫を好くし畫に巧みである。殊に山水
 木石花竹人物を描くこと尤も精巧緻密であつ
 た。この文に「石に入り木に入る」とある
 は「王羲之、趙子昂が石に入り木に入る」を
 見よ。

てうせんたか 鶯・熊鷹・白鳥捕りの
 朝鮮鷹(百日曾我)

「朝鮮鷹(朝鮮から来る大鷹。倭訓菜「たか」
 の條に「たかなる者を大鷹と稱す。大鷹は朝鮮
 より來り」と)。
 てうぢやう (ちやうら)を見よ。
 てうはつたいて 超八醒醐の鶯の
 峯、上なき御法と説かれたり
 (百日曾我) 日頃信に奉るてうはつ
 たいの法華經力(五人兄弟)
 「超八醒醐法華經の教は八教に超え勝れ、
 然も八教を攝含せる醒醐味の教である意。
 「八教は天台宗と云ふ所で、藏、通、別、圓
 の化法の教と、頓、漸、秘密、不定の化儀の
 四教をいふ。醒醐味はその條を見よ。
 *てうぶく 味方の祈禱敵調伏と觀
 念(國性施)
 「調伏探支記(四)に「調者調和、伏者制伏、謂
 調和控御身口意業、制伏除滅諸惡行故、
 と見えある。眞言宗などでは、祈禱によつ
 て佛力を頼み、法力によつて怨敵を降伏せし
 めることによふ。
 *てうもく 御褒美にこの鳥目百足
 下さるる(夕霧)
 「鳥目鏡をいふ。藤原隆家抄に「鏡を鳥目鏡
 眼と云は何の謂ぞ、鳥目補眼青鳥など皆料
 足の異名也、鳥の目は圓き故に爾云、鳥の大
 小同く目の圓なる様に、鏡が其異異れども、
 其形共に圓きが故也。」
 てうらい 「ちやうら)を見よ。
 *てきてん 市之進一流は東山殿よ
 りてきてん、一子相傳の大事なれ
 ば(權經三) 雪舟のてきてんとし
 代代の御扶持人反魂香。
 「權傳の傳とも書く。正統の相傳。直傳。合
 類大節用集(享保二年刊言辭門)「傳、又
 云直傳。」

てきないこむ 二合半の盛切おたい
 喉に詰つて、ぎつちぎつちてきな
 いこんで(こ)はります(香庚申)
 物詰つて苦し。せつない。じつて。越
 谷秀真編 物類釋(五)に「勞して苦しむこ
 をせつないといふ。又じつてないといふを、
 加賀にてテキナイといふ。現今も岐阜縣吉
 城郡袖川村地方では「苦し」と云ふ意に
 「てきな」といふてある。
 *てくすねひく そりやそりや來た
 ぞと、三人が手ぐすね引いたる顔
 色、小菊遠目にはつと驚き(安毅)
 さあ下馬せうかかせまいか、但し引
 すり下さうかと、手ぐすね引いて
 せめつ(袴袴)
 手に鑿煉を引く。力を入れようとする時手
 に「睡して物を取る。轉じて、充分用意して敵
 の來るを待ち受ける。鑿煉とは松脂と油とを
 練合せて作つたもので、物を手に取る時之を
 つければ落ちぬからかくいふ。保元物語に
 「手ぐすね引いてためらひ見る程に」。
 てくら 頭は日本、胴は唐との襟界、
 ちくろでてくらの一夜檢校、終に見
 馴れぬ立ばえ(博多) 阿彌陀佛ま
 て質屋(飛ばし、手ぐらまぐらに
 調へ(女稱)
 「てくら」と云ひ、手暗または手黒の義。目
 當のつかぬこと。當座ごまかし。俚言集覽に、
 「手くら。手くらとも云、毛吹草(雪を花とし
 らすは風の手くらを説く)。
 「てくらまぐら」は、手暗目暗で、目前は暗で
 當座暗きをいふ。(俚言集覽に)「手暗目暗な
 り。西鶴編の織留(元祿七年刊)巻五、具足
 甲も質屋の條に「この歌千軒何をかし世を
 渡るとも見えざりしに、朝夕の輝立てけるは、

せめても大川の舟着にて、繼から袖へ身代の
 指を取つて、手ぐらまぐらと年浪をわたりけ
 り。江島屋其換機世間手代氣氣に「算用あ
 ひを度度聞けば、おのづからてくらまぐらの
 韻まはしもならず」。
 *てこ べかかや並んだ妹背の中、そ
 なたのやうな女房が千人萬人妨げ
 なしたてをに入れても離れはせぬ
 (薩摩歌) 鍛冶屋のてこの衆、てつ
 からりころり(永米目) 大名方の御
 墓のそば見苦しき素浪人の古塚、
 てこの者どもこれ跳ね起して棄て
 る(扇八景) 小藤太がかんづか掴ん
 で取つて引伏せ、てこのまものに
 縛り上げ(扇八景)
 「搦子楯杆をいふ。木石を引く下に木槓を
 くはふ、これを搦といひ、手木の義である。
 「搦子の衆または搦子の書とは、楯杆をも
 つて働く人だち、即ち鍛工、石工、土工の人
 だちをいふ。」「てこのまもの」とは、搦子の者
 の使用する衆をいふ。「まもの」は眞物で、即
 ち麻原のこと。「まもの」を見よ。人論訓蒙圖
 最(元祿三年刊)卷三に「搦者。普請の場又は
 大石大木を引動か役人、職口をもつて打立
 てて引く事あり、是によつて、職者といふ
 は職口者といふ事ならず」。
 てこのぼろ 堺町・木挽町のてんつ
 くてんつくでこのぼろ、辨慶や公
 平がえいやつてこのえなど斬
 合を見せませう(丹波興作)
 「てこのぼろ」の靴。傀儡をいふ。偶人を唄に
 合せて舞はせる伎。
 てこのまもの 「てこ」を見よ。
 てし 千手の眞言十萬遍唱へ込みた

大事の數珠物體なくも氣にかか
る、水品と琥珀と半裝飾の紫房、
でしとだつまば珊瑚珠ぞや(李常盤)
〔弟子珠と達磨珠を云ふ。〕でしとだつまばとは、
弟子珠と達磨珠とを云ふ。數珠には必ず達磨
と稱する母珠と四天王に象れる弟子珠とがある
。念珠略説、數珠標榜の條に「凡そ念珠に
多種あれども一百八顆を以て通途とす云云、
母珠は阿彌陀佛なり云云、日本の風俗にて母
珠を達磨と云ふことは、梵語の達磨をば法と翻
す、阿彌陀佛は説法を主り給ふが故に達磨と
は云ふなり、又母珠の下に一小珠あるは補處
の弟子なるべし。』

*ていつかい 形を吹出すていかい仙、
蛙を愛せし蝦蟇仙人(蘇合殿) 煙管
くばへて吹く息に、鐵拐が鐵を延
ばしけり(青庚甲)

〔鐵拐鐵拐仙人をいふ。支那の仙人で姓を李
とす。其質癡にして道術を得、氣を吐ら
て己が姿を虚空に現出する術を行つた。云
。書言字考節用集に「鐵拐。(飛仙傳)今世
往在所聞、吐氣釋象者則是矣。立原萬壽、
此君當後素談に「鐵拐仙人の我形を吐出せる
在りて、遊魂して華山に赴くとあれば、此
魂の形を如此處に畫けるものなるべし。好
色一代女、卷二、世間寺大黒の條に「脇まきぎ
を又明けて昔の姿にかへるは、女鐵拐」と見
えてゐる。これも鐵拐仙人が氣を吐らて、
己が若し姿に象を轉じるといふに據つたので
ある。〕

ていつかい 花街へむかぬていつかい疵
物、臍が出臍大體のこととなく、腹
の上の一番西瓜置いた如く(隅田川)
今日の料理は芋一種、ていつかい所

を御目に懸くるが御馳走(青庚甲)
目玉刺出し、耳朶でつかく五百八
十七曲り(雪女) 信州木曾の山家
物、ていつかい冷ゆる寒國の(薩摩歌)
「ていつかい(出来が)轉じて「ていつかい」となり、更に
促音加はつて「ていつかい」となつたのである。
物の大なるをいふ。度外。現今でも「出来た」
と云ふことを「ていつかい」又は「ていつかい」と
云ふ。千葉縣印旛郡地方では、大なる意に「て
いつかい」または「ていつかい」と云ふ。
ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

た、一走り歸つて着替の拾持つて
來い(鐵籠三)
〔鐵籠三、幼年の奉公人をいふ。春明退朝
錄に「轉語、律令有り子推、推子不通、少
壯之氣、當是丁稚、唐以三大帝歸、遷之、損
其監書云。』(爾瓜咄)小者をばていつかち
へる義なりと云ふ、よく考へて見れば、
六の裏は一ぢや程に、まてこて考へて見れば、
二才の義であるとの洒落である。〕

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)

*ていつかちない 向隅からていつかちない
光物が飛んで出て(二枚指) 此
度お鹿島の御寶殿より、ていつか
ちけな光物が筑紫の方へ飛出
て(用明天皇)



【わくせんてつ】

奥山のててうちのでんぐりぐり果
の木の、木の根を枕に轉寝(たね) (博多)
日次紀事、延寶年中成、九月の條に、此月處處
山林出果、丹波大栗爲名産、其中至大者稱
之謂出落栗、土俗諺言、古有不孝之子、以
斯栗投父而傷之、因號爲氏字知栗、氏後
字知即擊父謂也。「おんちが在所はの云云」
をも見よ。

ててなしがね 二百餘人の玉蔓、夕
べ夕べに産出すててなし金の攫取
り(酒呑童子)
〔父無念元手なしに得る金。勞苦しない得
る金。〕

てならひ 紅梅、竹川、橋姫に手な
らひ(浪鏝)
〔手書源氏物語中にある巻名。〕

*ててなしの内、貧女が一錢手の内の片搗
き麥を御鉢に受け、三寶供養六道
の、有縁無縁の御廻向あり(孕常盤)
顔で睨みつ袖引きつ、手の内つま
むも一むかし、古い仕掛が田舎な
り(香庚申)
〔手の内の片搗き麥とは、一握の片搗き麥の
こと。〕
〔手の内つまむとは、思ひ人の掌を軽く
抓つて、戀情を察しさせるをいふ。〕

*ててなし 何ぢや加子の淺漬ぢや、一
段よからう、それに出花をつけた
らばと、茶臼形になるを見て(今宮)
あかゑの茶碗手にすみて、でばな
一つあげましょと差出せば(次朝日)
〔出花)茶に湯を注いだ初の花やかな香味よ
きもの。〕

*ててなし 白須賀ちよいと越えて、手
はんこざるか振袖に、ヤ此この新

居(い)切、舟に召せ召せ(丹波與作)
〔手判に時用ゐた旅行券。舊藩時代旅行する
に其所所在地の名主五人組の手判を得て、開
所の番人にそれを見せ通過を許されたるの
である。殊に新居の関と箱根の関とは、名主
五人組の旅行手判無くてはどうかして通過を
許されなかつたのである。次に記したるのは、
寶暦年間所留書大開所留書一件の古寫本中
に見える手判である。〕

二月幾日
幾日渡 箱根 押切印也 誰
幾日渡 同 何町家持 誰
根府川

てぶりうぐひす 聲せぬ夏の手振
驚(女殺)
〔手振驚嚇らぬ手ぶらの驚。必らずしも驚は
要に鳴らないではないのであるが、三才圖會
に「浪山記云、驚如鶴鳴而色蒼、每至正月
月、鳴曰、春起、至三月、止鳴曰、春去、採茶
之候也、呼爲鶴鳴鳥」と見えたる。異林字
のこの文は、森右衛門が與兵衛に言はうと
欲する注意も敢て言はないで、馬を促す「は
はははは」の掛聲で、手振で心を示すつ
立ち別れるを、要せぬ夏の手振驚というた
のである。〕

てへれば 「てへれば」を見よ。

*てへん 兜のてへんを地に附け申
さん(聖禮本)
〔頂通)兜の頂天に鉦座あつて、その真中に孔
があつて八瓣座といふ。この邊を「てへん」
(頂通)といふ。平治物語卷二・待賢門軍の
條に「兜のてへんに熊手を打かけん」。

てまどう とても弱き平氏の侍、ひ

とりつ殺さん事てまどうな
り(佐佐木)
〔てまどう(手間選)であらう。間意(ま)こと。
面倒。〕

てまり (堀山堤)
〔手書)堀木の名。幹の高さ六七尺に成長し、
葉は皺あつて固く、こねうつきに似てゐる。
初夏の頃小花群つて咲き、初は青色を帯び漸
次に純白色に變じる。別に櫻の一種にもこの
名のものがある。〕

てみせきん 傍でお菊は氣を採み
見えにけり(警門帖)
〔手見爲禁)將業の通語、己が持駒を相手に見
せぬこと。この文は、涙を手で隠して見せ
ぬことに、將業の通語、手みせ禁をいひかけ
たのである。〕

てみそ この世の手みそ報で、若
し青馬の腹(など)生れては行かれ
ぬか(嵯峨天皇) さすが恩愛の手み
その癖ぞかなしき、あの親の札に
こそ二三四やあるらん(大織冠)
〔てみそか)手密の略。人に見られないやう
に隠匿にする手わざ。母牌札をこまかす言葉
をいふ。〕

*てもめ 太鼓過ぎてとささやくは、
女郎の手もめの振舞客(安殺)
自費で他人を養應すること。「もめ」を見よ。

てゆふぎり 坂田藤十郎が夕霧を今
一度見たいと思つたが、此紙子で
手夕霧を仕る(旋鏝)
〔手夕霧)手は「手もめ(前條を見よ)などと
いふ手」で、即ち自分で夕霧の芝居をすること。
異林字作「夕霧阿波鳴渡に、藤屋伊左衛門寄
落し、紙子を見て、夕霧を吉田屋喜左衛門方

に訪ふ場面がある。江戸屋勝次郎寄落し、紙
子を見て、吾妻を吉田屋仁三郎方に訪うた
のであるから、「此紙子で手夕霧を仕る」とい
たのである。伊左衛門に藤十郎が扮したとい
ふ「夕霧名残の正月」といふ本は、傳はつてゐ
ないの何ともいへぬが、恐らく夕霧阿波鳴
渡に酷似したものであらう。

てらいり 和子設けて久太郎町と
て、やがて寺入久寶寺町(今宮)
〔寺入)寺小屋へ入學すること。「てらこを見
よ。異林子のこの文は、和子設けてその名
にふさはしい町名の久太郎町にいひかけ、そ
の子のやがて成長して寺入を、寺名に似た久
寶寺町にいひつけ、久太郎町、久寶寺町は二
郎長衛門おきさの進修といひ替へたのである。

てらこ 柳の馬場のおこうと申す綿
摘教(へる)寺子取(酒呑童子) 視れば
古の寺友達、義朝の膝元去らす遊
谷の金丸幼顔疑なし(烏帽子折)
〔寺子)寺子取とは、寺子屋から弟子を取つ
て何業にても教へる者を云ふ。「寺友達」と
は、共に寺子屋で學んだ時の友達。寺子屋は
江戸時代民間に開かれた私塾で、士分や平民
の兒童を教育するを目的とし、識字習字算術
を授けた。鎌倉時代から教育は専ら僧侶の手
に任せ、江戸時代になつても寺院を私塾に當
てたから、寺子屋といふたのであるが、中に
は海部教師の宅百多家浪女などがあつて、
堀内には机を並べ、男女席を分ち、教師は御
面に位置を占めて監視した。生徒が寺子屋へ
入學するを寺入といひ、生徒を寺子といふ。

*照手姫 照手の姫のやつれ草、常陸
小萩も夫ゆる、身を旅籠屋の水棚
の(反魂香)
横山郡司の女である。小栗判官相模の陣所に
あつて照手姫と馴染み、姫の兄三郎と隙を生
じた。よつて横山一家の判官を毒殺

し、郎黨卑士をして姫を相撲沖に沈めしめようとした。鬼王は姫を沈める情に堪へないで霧に遁れしめ、照手姫なるが如く見せて石を沈めて三郎を救いた。照手姫はこれより諸方に漂浪し、遂に美濃番重の宿、萬屋の長に買はれて、名を常陸小菘と替へ、水屋の荒仕事に驅使された。折しも上野が原の幕所から判官の御現はれ出たのを、藤澤寺の上人これを車に乗せて、紀州能野の薬湯に浴せしめた。小菘はその餌鬼が我夫であると知らずして、この供養の車を頼いたかくて薬湯と小菘の信心によつて蘇生した判官は本領安堵となり、萬屋を訪うて、皆て車を獲いて呉れた小菘に禮を述べようとして、計ずも我が妻我が夫なので、驚いて其奇遇を喜んだのである。

委しくは當流小栗判官などに就いて見よ。
*てれふれ てれふれなしに七百石、すればお前も御手柄(萬年争)
「こりふり(照陸)の輓説。
*てれめんていな てれめんていなばじりこん、さんとらにい、いよう萬能膏(大磁冠)

「子即ち締縮(西班牙語) de celina. てれびん油即ち松脂油。華英通商卷四、阿蘭陀土産の條に「油藥 II アゼトウナ、ハルナメ、テレメンテナ、丁子油、琥珀油ノ類、此外色色外科ノ用ル處盡ハ不記、諸人ノ知ル處ナリ」。

*てんき 草鞋も脱がす土足の郎等、出居も座敷も踏立てて奥の間にこそ入りけれ(齋藤)

「出居(客殿または客室をいふ。この語現今も常陸地方で用ゐてゐる。錦文流舞一傾城八花形に「友綱も方方撥けと宣ひて、てゐの大庭に下立ち」和訓栞に「てゐ。東鑑に出居と書けり、愚昧記にも出居と見ゆ、内より出で客に對し居る所といふといへり)。福窓自

語に「出居といふは舊殿につづきて客に出達所なり、……、今も東國に出るも座敷を出居と唱ふは古風の殘れる成べし」。

*てんきな 出女ども不審を立て(松風)

「出女(術道にある旅籠屋の客引き女を云ひ、旅籠屋を泊めて寝を隔りだものである。門口に出て、おぢやおぢやれと旅人を呼んでみたに出て、出女もおぢやれとも云う大である。井原西鶴撰、好色一代女(貞享三年刊)卷六、旅泊人許の條に出女の事と記して「松坂に行き旅籠屋の人待女となりて、晝はまがらの鐘聲し、八つ下りより身着袴、所柄の伊勢白粉、髪は玉置の頭に油を付け、天の岩戸の小間より出女の顔白と見せ、講藝語の通し馬を引込み、最掃腰の日那、其は備後の御同伴様と、其國里を一人も見逢へる事なく、其地方言葉をつかひ、嬉しがる、惚かけ、はや奇麗の極めもなく、ここに腰を抜かし、眞實はなきたはむれ、女はすけるやらにおつれ、荷物を取込み云云」と見えてゐる。「おぢやれをも見」。

*點 何不足はなけれども内では誰が點を打つ、大かまのめらに懲果て死ぬる身な(いげば(卯月調色))
「點を打つとは、和歌俳諧などに批點を打つことから出た語であつて、批難するを云ふ。源氏物語、若菜上の巻に「人に點つかるべき振舞はせしと思ふもの」を」。

*てんいちてんじやう 思へば天一天上の五衰八事間日(大經師)

「天一(上天)神の天に上り居る間の稱で、神の日のより天上との間十六天である。この日の巡行する方角を裏よりと込み、天一(上天)十六日間(八方)行つても障りなく吉日とする。巖林寺のこの文は、天上の五衰

「その條を見ごとて天人の果報の滅盡する相なれば、それを我が果報の滅盡することにきかせ、それに天一を附加して處上の語を用ひたまでである。

*てんがいは 幡・天蓋・袈裟の一重も上げはせす(卯月調色)

「天蓋(佛身の上に、(佛變圖義所載)さすきぬがさで、軒節を垂れ調頭、の曲つた柄の端に吊すもの)。



【天蓋】

*てんがう ぶつと笑ひしてんがうも明日の哀となり(重井簡)

なまいだ坊主がてんがう念佛申して来る(笑細島) てんがうな手形を書き無筆の母を宥めしが(冥途飛脚) おききに心ある奴がてんがうかわくに紛れない(今宮)

鐵蹄。じやうだん(悪戯。いたづら。浪華方言に「てんがう。江戸でいふじやうだんなり。按ずるにこの語の古く見えたるは、釋無任撰(沙石集(弘安二年)卷三上の目錄の條に「癡狂人の利口事」とありて「癡狂」に「てんがう」と擬假名が附てゐる。なほ本書の序文に「狂言稱語のあだなる戲を縁として佛乘の妙なる道に入れ」と見え、即ち癡狂人の利口は狂言稱語のあだなる戲である。なほ今義辭に「癡癡時臥地吐(癡吐)無所見、狂或自欲走、或自高稱(聖賢)也」と見えてゐるやうに、要するに「てんがう」は癡狂の異音で、もと病名である、それを癡狂の如き言動に喩へた語であらう。又關西地方で、子供などが親の仕事の手傳をせうとして、却つて邪魔をすることを「てんがうをする」といふて「う」は手事の戲である。この「てんがう」と「癡

狂」とがてんがうがらつて「てんがう」になつてう」となつて、戲語の意にふ語になつたのであらう。安原正章の嘉多言(安原三)にこの語に就いて説を述べたてれは煩はしければ記字であらう。また「てんがう」を轉業と書くのは當字であらう。一説にてんがうは「てんごん」(謡曲の轉じ)た語であるとも云ふ。謡曲は法華經に「我慢自矜高、謡曲心不實」と見え、大鏡(卷八)高麗人が貞信公を相したの對して貞信公の言に「われをあるが中にぎえなく心てんごんなりとかいふは恥かきこと」と見え、その語であるが、さて「てんごん」の本來を謡曲とするのめいがか。又「てんごん」は佛敎に典故があらうとの説もあれど、何れも確でない。「てんがう」の上口調は、何れも確でない。「てんがう」の上口調は、何れも確でない。「てんがう」の上口調は、何れも確でない。

狂」とがてんがうがらつて「てんがう」になつたのであらう。安原正章の嘉多言(安原三)にこの語に就いて説を述べたてれは煩はしければ記字であらう。また「てんがう」を轉業と書くのは當字であらう。一説にてんがうは「てんごん」(謡曲の轉じ)た語であるとも云ふ。謡曲は法華經に「我慢自矜高、謡曲心不實」と見え、大鏡(卷八)高麗人が貞信公を相したの對して貞信公の言に「われをあるが中にぎえなく心てんごんなりとかいふは恥かきこと」と見え、その語であるが、さて「てんごん」の本來を謡曲とするのめいがか。又「てんごん」は佛敎に典故があらうとの説もあれど、何れも確でない。「てんがう」の上口調は、何れも確でない。「てんがう」の上口調は、何れも確でない。

*てんがう 猿樂田樂伎樂を奏し(賀古教信)

「田樂中古田植の時に笛鼓を鳴して舞ひ踊つたのが、後には田植の時ならでもその景狀を羨しが、支那傳來の散樂を取交へて發達した一種の舞樂である。

*てんき 天機ますます脱ばしく、五穀豐饒萬民快樂、君も行幸なるべし(松風) 勅使物取直し、てんきの趣餘の儀にあらす、抑汝代々仁道を尊み物の命を助くる大願代らぬ由、感じ思召され畢人ぬ(松風)

「天機(天皇の御機嫌。天皇の御仰。天氣とも書いてゐる。平治物語・光顯御幸内の條に、

「てんごん」は佛敎に典故があらうとの説もあれど、何れも確でない。「てんがう」の上口調は、何れも確でない。「てんがう」の上口調は、何れも確でない。

「別當それは天氣にて候ひしかばとて赤面せられけり」。

てんきう 典厩の御所に御用あつて

遅参せり(葛藤太平記)

「典厩」馬寮を唐名に典厩署といひ、左右馬頭を唐名に典厩令といひ、馬助を唐名に典厩少令といひ、馬允を唐名に典厩丞といふ。

*てんぐ 俄に吹来る天狗風、岩も枯木もどろどろどう(萬年草) 天狗道の三熱の其熱湯ともいひつべし(用明天皇) これば猿の末廣が、いやいや天狗の笄ならぬ(禰良) お二人のお蔭で煙草入を落しました、中に頼母子の懸錢七十四文あつたもの、定めて狗賓に掴まれたでござらう、正眞の天狗頼母子ぢやと(萬年草) 大石小石四方八方はつたばつたと投込み投込み、雨戸障子敷居鴨居打碎き打破り、軒の瓦も砕け散る、天狗様もかくやらん(井筒)

「天狗」俗説に形人の如く、鼻高く羽鬚を有し、神通力を具ふと云ふ。天狗の語の古く見えたるは史記・天官書に「天狗、狀如天蒼星、有聲其下止地類犬、所隨及炎火」。舒明記九年二月の條に、「大星從東流西、便有聲似雷、……儼受曰、非三流星、是天狗」とある。蓋しこんなことに佛説などが加はつて俗説を作つたのである。

(天狗風)は旋風をいふ。住時は不思議のことがあるればこれを天狗の行爲のやうに思ふたのである。

「天狗道の三熱」とは、巢林子作・常盤第一に「我朝は天狗の法、我慢高慢の人の心を極家として、善根を憎み悪行を悦び、夜に三

度日に三度瀧の熱湯を飲む苦しみ、天狗道成就し生るも死も死もなし」とあるによつて知れる。蓋し佛説に、蛇體に三熱の苦患あるといふ、これを天狗道にも及ぼしたもので、謡曲・葛城には「三熱を神に及ぼして」、「この山の名にし須ふ葛かづらにて身を戒めて猶三熱の苦しみあり」と見えである。

「天狗の笄」とは、山家者は琵琶の撥を嘗て見たことも聞いたこともないによつて、さて笄に似た不思議な物だと云ふのでかくいひなしたのである。

「天狗頼母子」は雷籠の一種で、當るも不思議、當らぬも不思議と、これを天狗の行爲になしていうた名である。大天歌(延寶九年刊)巻五に「誰様の先より風はくぐりきて(進)、はや雲爪天狗頼母子(井) 西鶴置土産(元祿六年刊)に「鼻の高の子供を揃へて、これぞ天狗頼母子、突常次第の遊興。俗つれづれ(元祿八年刊)に「愛宕の天狗頼母子とて仕合せ次第に取當り」。世間手段氣質享保十五年刊巻一、色里の投節死さ止ままい子息が悪性の條に「身のなる果は天狗頼母子とて、曲物に「から十五まで札を入れ、右の手に錐を持ち、往來の人をたらし、息子を相殺にこしらへ、往來する人の錐をとりし博奕業として追立てられ」とありて、錐で曲物の中の札を突當ててゐる繪が載せてある。

「天狗様」とは、誰が投げてゐるか知れないで飛來る際のこと、天狗の行爲にいひなした語である。

*てんくわう 娑婆てんくわうのさかひには戀も無情もなかりけり(三世相) 電光石火の影の中には生死の去來を見る(兼好)

「電光石火の間の義で、極めて短い時間といふ。電光石火は、稻妻及び石を打つて出る火は共に極めて迅速で、且つ果敢ないものな

るが故に、人生の迅速で果敢なく無常なものに喩ふ。淮南子に、「人生天地之間、如擊石見火電光過隙」。しやばてんくわう「つらつら世間の云々」をも見よ。

てんこ 親子籠太鼓、跡は天鼓微塵(酒吞童子)

「天鼓」謡曲名。天鼓と云ふ者が勅に連うたによつて死罪に處せられたのを、朝廷から佛事させたによつて成佛したことを作つてある。この文は謡曲の天鼓に粉微塵をいひかけたのである。

てんごう てんごうを見よ。

てんこつ 今の働き劔術稽古の手續ばかりにあらず、天骨自然の妙處感じ入る(關八州)

「天骨」言まれば、天骨。下學集・態藝門に「天骨。言天然之有骨格也。」

てんじや 明日は天赦鬼宿日、萬事揃うた大吉日(淀塵)

「天赦」天赦日のこと。天が萬物を養ひ育てて其罪を赦す日、大吉日であつて、春は戊寅(壬木)の日、夏は甲午(木・火)の日、秋は戊申(土・金)の日、冬は甲子(木・水)の日をいふ。この文は天赦日とそれがまた鬼宿日の日をいふのである。鬼宿日はその條を見よ。

*てんじやう 殿上・日御座・夜の御殿(振袖庭)

「殿上」酒宴殿の南庭にある殿上の間。

天上の五衰 「五衰」を見よ。

*てんしよく 太夫ばかりが五十人、天職が七十四人、鹿戀の端の二百人に餘つて(酒吞童子) さびしき梅も捨てられず、これ天職の姿にて(生玉) 梅花油のかなりくる床は

「天職梅の花(銚合歌) 「天職」天神(遊女の位)をいふ。天神を梅ともいふ、梅の自然に備はれる清楚な姿と云ふ意で稱した名である。「てんじん」を見よ。

てんしよくこく (吉岡染)

「蘇武は足足を切られても云云」を見よ。

*てんじん 太夫天神に引すり引張られ(淀塵) 親は太夫買ひ、子は天神買ふといつて笑ひました(分戀) 天神太夫の身でもなした、さもしい金に氣が觸れた見世女郎のあさましさ(冥途飛脚)

「天神」梅または天職とも云ひ、太夫の次に位する遊女の稱。この遊女の扱代はもともと二十五匁であつた。二十五日は北野天神の縁日なれば、二十五の縁によつて天神と云うたものである。貞享・元祿頃は三十匁程に上つたれども、なほ舊によつて冒稱した。御前儀經記(百人女郎品定所載、西川祐信畫)

(正徳二年刊) 巻一、傾城の因縁に「天神は太夫より少し劣れり、釋名に三尺と和名に梅と云ふ、唐韻に天職、俗語に中位とも宗ともむらとも格子とも云ふ、古語に二尺五寸



(神天)

(人倫訓蒙圖彙所載)



〔神天〕

とらへり、これ天神の縁日を
かたどれり、何
時の頃より直上
りして三尺にな
りたまひぬ。
異本洞房語圖・
上、京都遊女の
名目の條に「天
神、勸銀二十五
匁なれば、北野
の縁日に取て
天神といふ、吉原にては此名なし。

てんせん 天仙子色の錦の帳さつと
開け(浦島)

【天仙】仙人。抱朴子に「按仙經云上土靈形
昇、謂之天仙」。

*てんたいしくわん 比叡山の西塔
にて天台止観の旨を開き、一念三
千の機を顯はして(天藏虎)

【天台止観】天台大師撰述の摩訶止観を云ふ。
一心三觀の觀法を説き、天台宗の實踐的方面
を明にし大書である。これが實地の修業を止
観業と云ふ。「天台止観圖頌」とも見えてお
る。圖頌とは天台教法の圖解無碍にして化益
の頓速なるを云ふたものである。

てんたいにゆちくわ 接待に天台
乳菓の茶を煎じ往來の人に施
し(百日曾我)

【天台乳菓】佛が涅槃經に於て乳等の五味を説
かれたのによつて、天台大師が五味を佛所説
經の次第に當てて譬へた。この故事によつて
天台乳菓を美味の意にかせたのである。
天竺將來の御袈裟衣 弘法大師は天
竺將來の御袈裟衣、御弟子二人に
灑水させ(摩訶天臺)

新義律宗家の三衣をいひ、環釧を用ひざる
袈裟である。「將來はもち來る機」。

てんちくらうにん かはいげにおき
ばもほんの天竺浪人(生玉心中)

引續して「天竺浪人」と雖ども、天竺浪人をい
ふ。西遊一風韻・脚色餘論三編下に「世に天
竺浪人と云ふは逐電浪人を稱語して電逐浪人
といふ」。近代長者鑑(正徳四年刊)卷五に、
「世間のつなは切れてからふも、神
にもつかず、磯にもつかぬ天竺浪人の身とな
り」。商人重配圖一之巻に「其後段段御前
の首尾あしくして、細國へ参ること叶はず、せ
ひもなき仕合は代つづきし家をはなれて、
一門難波に歴歴としてあればまづ此かたへ引
込み、天竺浪人となつて細國の鬻行をうかが
うてみられる」。

*てんぢぢめ 庭の松風三味線の、てん
ぢぢに通ふ細廊下(酒香童子)

【てんぢぢめ】(轉手)である。天柱と書くは當字
なれどその用も古くからある。三絃又は琵琶
の頭部にあつて、絃を巻きつける棒をい
ひ、今では轉軸といふ。

てんつくてんつく 堺町木挽町
のてんつくてんつくでこのば
う(舟屋興作)

芝居の囃子太鼓の音調を形容した語。また轉
じて芝居の意に用ひふ。手柄岡持撰、後は昔物
語に、「てんつくてんつくとんの前を通りてなど言ひ
り、てんつくてんとは芝居の事也、堺町を通
りしといふ事也」。

(曾根崎) このだいそれた言譯がで
んどでもや立つつべきか(今宮)

いやこれ親父様、でんどで披く讓
り狀、後の證據に封も解かず持ち
たれば(卯月杓) 斯うたくんだ事な
れば、でんどへ出てもおれが負け
(曾根崎) この物兵衛とくじのみや
のとわかすげな、あはれでんどへ
出やれかし(淀壁)

【てんどう】(出所)の詠略。人の出る所。公衆
の見所。公男。公儀。法廷。
*てんどう てんどうの汝等がたど
ひ須彌山は動かすとも其袋は動く
まじ(彌迦) 客は顛倒、花車も下女
もうろたへ(女殺)

【顛倒】妄相の爲に自ら迷妄して諸法の實相を
見ることができないをいふ。法華經・譬喻品
に「我等住於此、以諸神通力、令顛倒衆生
雖近而不見。また、驚いて平靜を失ふこ
とにいふ。

*てんどう 龍燈天燈かかげ添
(龍燈)

【天燈】天女の捧げる神燈。謡曲・白蛇に、「殊
更今宵は天燈龍燈神前に來現の時節なれば」。
天人の五裘 「五裘を見よ」。

てんば 此奴はしやべりのてんば
め、見附けられては大事(薩摩歌)
でしやばり女。出過ぎ女。轉婆は當字であ
らう。按しるにいと傳播より出で、言ひふらす
勢より、喋りでしやばりの意に轉じたのであ
らう。蘇福の爲兒紙下獄上書に「其舊詩已
自傳播。合額大節用集(享保二年刊)言辭門
に「轉婆。女兒所言」。安馬であるといひ、
または佛説語であらうとの説あれど、しか

が。また難波みやげ巻之三に「てんばは顯婆
と書也。顯婆と云ふ事なり」とある説も
いふが。

てんぶら てんぶらてんぶら、はは
ばんにやてちやるまひつばら
や(唐船歌)

【天竺餅】と題葡牙語「Temporas」である。
天主教徒が金曜日祭をテンプラと云ひ、こ
の日鳥獸の肉は食はぬと魚肉を食ふ。この語
我國に傳來して其義を轉じ、小麦粉を水に融
いて魚肉にまぶし胡麻油で揚げた物の稱とな
つたのである。

*てんぼ 餘り美しさにてんぼと思
うて、その夜一つ買うて抱いて寢
たれば(至生大念佛) ああ恥かして
んば言うて退け(日本武尊) てん
ぼ止み難く、亭主が眼もあらく
(虎が巻) 酒を飲むにも色色があ
る、色もなう飲むをてんぼ酒至生
大念佛) そんな事に今まで歩いた
事なけれども、てんぼの皮往つて
のけう(女房切) 言ひそこなうたら
大事か、口に任せてやつて呉れう
てんぼの皮とそ出でにける(反魂香)

女房に持つて下されとは、藪から
棒の異な物なり、てんぼの皮厚う
出ましよと(天神記)

運に任せどうでも成り次第の意にいふ。
自覺。ええまます。按するに「てんばは轉
蓮の説語であらう。蓮は蓮華の蓮で、人の流
浪するを、飛轉する蓮に譬へて轉蓮と云ふ。
曹植の詩に「轉蓮離本根、飄飄隨長風」。

轉にいふやうなつたのである。現今でも
福山市地方で用ゐてゐる語に、鼠に轉つて

悪質な發育を遂げなかつた爲に、食するに堪へないで捨てられる西瓜の果實を、「てんぼ西瓜」と云ふ。また放縱無法な者を、「てんぼ屋敷」とも「てんぼな奴」ともいふ。されば轉蓬は流轉、放縱、自暴などの意なるのである。風流散毒散(元禄十六年刊)卷一、長崎船の條に、「今とは違つて唐物あきなひは千里一はわの事もありし時節なれば、此少元手打込で巨暴に一もみんで見られし」とありて、「巨暴」に「てんぼ」と振假名が附けてある。「てんぼ止み難く」とあるは、謡曲、安宅にある勅進帳の文に「懸止み難く」とあるを、作かへたので、「れんぼ」に「てんぼ」をいひかけたのである。「せうかうかう大紋日」に云ふを見よ。「てんぼ酒」は自暴酒を云ふ。即ち酒を飲むにも女が待らでは面白くない、ええ儲よと自暴になつて飲む酒。「てんぼの皮」の皮は、絲瓜の皮、嘘の皮、すっぱの皮など云ふ皮の類である。尤も絲瓜の皮は役に立たぬ物なれば、かかる詞をなしたのである。べけれど、嘘の皮、すっぱの皮、てんぼの皮の皮はそれ等の聯想上から附加した語であらう。

***てんま** 道中の傳馬荷物など(三世相) 臺所荷は次傳馬、御莫籠荷物(通し馬三十駄(舟波與作))
[傳馬]宿つきの馬。(博多小女郎波枕に)「惣七はつと心付き見れば傳馬の中」とある傳馬は、傳馬船の略、即ち端舟のことであつて、ここに云へるとは別。

てんまこみ コリヤ爰に傳馬込にといふ聲に、惣七水棹押取つて狂ひ出で(博多)
[傳馬込]船の名所、荷物の表の開口(船艙)の左右にある出入口の別稱。和漢船用集巻十、船處名之部に、「開口(明律考水仙門)とらふの門と訓ず、表の口の口なり、或は

てんま とう

河口と書、船艙左右にあり、荷舟にて表の開口の口開込と云、傳間を引込處也。

***天満屋お初** 扱六番は曾根崎の、宮の木立も何時頃よりか、名立てがましき天満屋お初、よそに聞かざ(身に)しつみ川(卯月紅葉) 曾根崎心中に見える遊女である。「はこ」(假作人名部)を見よ。

***てんもく** 天日にこき集 錢酒(薩摩歌) やあ天目頭の糟奴、手並(以前覺えつらん(加増曾根)) 奴が今朝の朝酒の天目朝に、禿靴(堀川波朝) 鎌鎧は筑後の久留米、天目鳥毛は同國柳川(薩摩歌)
[天目]茶碗の稱。支那浙江、臨安縣の西北で、瀋縣と安吉縣との境界に跨れる高山を天目山と云ふ、高さ數千尺に及び東西に兩峰峙立して、絶頂に各一池を湛へ左右相對する状、恰も目の如くであるによつてこの稱がある。山中佳景に富み寺院塔塔散在して、支那佛教の根本道場と云ふべき處である。我國の僧侶が天目山に遊學して、此處の寺院で使用する茶碗を携へ歸つて天目と云うたのが轉じて、況く産地主となつたのである。抑も天目茶碗の茶碗の稱として福建省泉州府德化縣地方であつて、これを建業(福建省泉州府建安產の業の義)と稱し、建業天目の稱もこれによつて起つたのである。天目の稱は天目山嶽で燒いた名ではない。天目山では昔て陶磁器を燒いたことはいない。和訓栞に、「てんもく。磁をいふ、建安の天目山の名によれり、陶磁の深きをいふ、建業の名も同じ。」
[天目頭]とは、茶碗の形の頭をいふ。
[天目朝]は鑪籠の一種で、天目茶碗の形した鑪の稱。
[天目鳥毛]は天目の形した鳥毛で、柳川城

主・立花飛騨守 宗昌の鑪印である。



***てんもくら**い 口にて虎をぞ書きたりける、てんもくらいの眼の光、怒毛怒斑怒爪、千里も駈けん勢なり(反魂香)
[電目雷威]である。靈應夜話(安永七年刊)の呼吸龍加山の序文にも、「電目肉翅と見えて呼ぶ」

***てんややく** 京の御典藥にかへてからめつきりと藥も廻り(宵庚甲) 柳原の法師様、半井の御典藥、幸と和國様へ對馬の客から参つた朝鮮人參(反魂香)
[典藥]幕府の職制に、醫藥のことを司る者を稱した。典藥頭は毎年正月屠蘇を禁中に獻じ、御用料の醫師である。

***てんやもの** わしや店屋者ぢやないぞや(生玉) 君は賣物てんやもの(一膳限の假枕(虎磨))
[店屋者]店屋の賣物になる者の稱。遊女(茶屋者)は夜な夜なある客に色を賣れば店屋者といふたのである。易林本節用集に、「店屋」

***てんりゆう**はちぶ (會稽山)
[天龍八部]天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦をいひ、法華經、普門品の中にも見えてある。

***てんりん**わう 今宵のお宿は三千年に一度と聞く轉輪王の出世ぞや(國性禪後日) 位は轉輪聖王となる(西玉母)
[轉輪王]轉輪聖王とも云ふ。人壽無量壽より八萬歳までの間に出現し、寶輪を轉じて一切

の障礙を征服し、諸佛や佛法に盡されるよつてこの名がある。

天王如來 五逆の提婆は天王如來(重井簡) 迷へば佛敵、悟れば味方、善惡不二のしるしはこれ親音の慈悲の方便力、提婆が惡も觀音の慈悲末世の衆生に蒙れり(靈迦)
五逆罪を犯した大惡人提婆達多も、未來世に於て成佛し天王如來になるといふ、法華經、提婆達多品に、「提婆達多却後過三無量劫、當得成佛」(號曰天王如來)。謡曲・海人に、「五逆の達多は天王記別を襲り」。

點を打つ (點)を見よ。

どう 正心の紫苑、龍騰のあしらひ、胸に伊吹木のうつりよ(聖徳太子)
[どう]つくり(胴作)を云ひ、立花法式の名。立花時勢莊八に、「立花祓佛抄之馬、胴作とは心かくしの下より前圖の上までを云ふ。これ七つの道具の外にして、花形の中央を守り七つの杖を能く養ひ育つる物也」。

***どう** 瀬多の久三がどうの時、百切はつて見たつたば(舟波與作) 年季はこの玉をたつた三百のかたにはつて、既にどうへ取らるゝ處を(天總冠) どうとりの禱は四三五六社大明神(女怒) 我等は博打のどうとり、この頃續く不仕合(女禰) 調と書けども、枕草紙に「てうはみにどう取

と